きょうと福祉倶楽部だより

2019年 9号

ハーモニカが吹けた、喋れた！

きょうと福祉倶楽部は開設して15年。
これだけ長き期間にわたり活動するとたくさんのドラマが生まれます。
それは安っぽいテレビドラマとは違い、わたしたちの眼の前で起きる本物のドラマです。その感動こそがつらい仕事を多く抱えながらも明日も仕事を続けられるエネルギーです。開設当初、わたしが前勤務地で知り合いになったNさんの娘さんから連絡が入りました。
早速事務所にお招きして事情をお聞かせ頂きました。

事務所に見えた娘さん、表情は怒りと困惑に満ちていました。
事情を聞かせて頂くと一緒に住むおとうさんは要介護5。
介護の不安からひとつきのほとんどを特別養護老人ホームのショートステイに預けていました。月に僅か一日だけを自宅で過ごすという日々をずっと繰り返していました。
そんな日々を過ごす中、Nさんは施設で大きな声をあげるようになってしまいました。
施設は他の利用者の方もいます。大きな声に手を焼いた施設は娘さんに
「今後の利用は控えてもらいたい」と。今まで当然のように施設におとうさんを預けていた生活が一変するのですから。娘さんは納得がいかなかったのです。

それに怒った娘さんはそのケアプランを立てていたその施設を離れ、わたしたちにケアプランの作成を依頼することにしました
わたしたちはプランの作成をお受けしましたが、これまでのようにほとんどの生活を施設の中で過ごすのではなく、ご自宅でご家族の負担も減らしながら暮らせるようにプランを作り替えました。
ショートステイは基本的に月1週間だけにしました。
そのプランを娘さんに示したとき、娘さんの表情には「納得がいかない」という意思が読み取れました。娘さんはきょうと福祉倶楽部が代わりのショートステイを見つけてくれると考えていらしたのでしょう。

その不満を承知でわたしはこのプランを検証してもらいたいとお願いし、新たなプランが実行されました。
ヘルパーは1日に何度も短い時間ではありますが訪問し、週に何度かはデイサービスへ。お家にいるときは必ずベッドから離れてもらえるようリフトも設置しました。

この形が定着する中でいろんな変化が現れました。
まずは主治医も自宅にNさんがいますから月に2回は必ず患者さんを直接訪問して診療ができるようになりました。それは患者さんの変化を見ながらあらたに処方をする事もできます。
患者さんはこれまで以上に適切な医療が提供されます。

その形が定着してみんなが驚く変化がNさんに表れます。

喋れなかったNさん、とんちんかんながらも会話ができるようになりました。
Nさんのお家は農業。たくさんの農地をお持ちです。
訪問したヘルパーがいつものようにおじゃまして汚れたオムツを取り替え、リフトを使って車椅子に座ってもらいます。
その横でNさんの奥さんは作業が終わるのを見ています。その時にNさんはヘルパーに「あんた、うちの畑をあげるから嫁に来ないか？」と。
ヘルパーと奥さんは大笑い。
そしてもうひとつの変化は奥さんがNさんにハーモニカを手渡しました。
Nさんはそれを吹いてくれたのです。

わたしたちがNさんの支援を始めたとき、誰がこんな変化があると予測出来たでしょうか？
お正月を間近に控えてNさんの娘さん、
「今年の正月は越せないと思っていました」と。

ドラマを生み出す在宅介護がわたしたちの活力です。
これからもこんなドラマを目の前で見ていきたいと思います。